

第17期第5回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和8年1月22日（木）13：30～15：43
場所	青森県総合社会教育センター 第2教材開発室
出席者	<p>▼委員</p> <p>島守 詩子 千葉 栄美 小野 淳美 米田 大吉</p> <p>小寺 将太 岡 詩子 岩本 ヤヨエ 米沢 美幸</p> <p>小笠原 秀樹 工藤 貴子 越村 康英 松浦 淳</p> <p>高砂 充希子 山崎 結子</p> <p>▼事務局</p> <p>清川 喜之（生涯学習課長）</p> <p>西塚 努（生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理）</p> <p>三上 崇裕（生涯学習課企画振興グループマネージャー） 他2名</p>
内容	<p>1 開会</p> <p>2 案件</p> <p>（1）第2回社会教育委員の会議での検討状況について</p> <p>（2）諮問に係る審議事項1の内容検討について</p> <p>（3）その他</p> <p>3 閉会</p>
配付資料	<p>1 第17期青森県生涯学習審議会次第</p> <p>2 第17期青森県生涯学習審議会委員名簿</p> <p>3 第17期青森県生涯学習審議会座席図</p> <p>4 【資料1】第2回社会教育委員の会議での検討状況について</p> <p>5 【資料2】諮問に係る審議事項1の内容検討について</p> <p>6 【資料3】第17期青森県生涯学習審議会・第37期青森県社会教育委員の会議スケジュール</p> <p>7 【参考1】実地調査に係る意見整理</p> <p>8 【参考2】諮問書</p>

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

会長 次第に従いまして、進めていきます。まず案件の1番目になります。第2回社会教育委員の会議での検討状況につきまして、事務局から説明をお願いします。

(事務局から「資料1」について説明)

会長 これまでの説明内容につきまして、委員の皆様から質問やあらかじめ確認しておきたい事項などはありませんか。よろしいでしょうか。

続きまして案件2に移ります。案件2は、「諮問にかかる審議事項1の内容検討」です。事務局からすでに説明があったとおり、審議事項1は3つの大きな柱から成り立っています。

まず1つ目が、「幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」です。2つ目が、「こどもたちの地域愛を育むための方策」です。そして3つ目が、「地域の大人たちの学び・活動の成果をこどもたちの地域学習に生かすための方策」です。これらが3つの柱として位置づけられていますので、本日は柱ごとに区切りをつけながら、一つ一つ内容について慎重に検討していきます。

まずは審議事項1の(1)です。繰り返しになりますが、「幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」ということについて検討を進めます。資料2をご覧ください。配布されている資料2は、先ほどの説明にもありましたとおり、第2回社会教育委員会の会議での議論も踏まえて、現時点での内容をまとめた骨子案となっています。

審議事項1(1)におきましては、まず冒頭に、そもそも地域学習というものをどういうふうに捉えたらいいのだろうか、地域学習を構成する主要な要素とは何なのだろうか、ということを改めて整理してみてもどうかと考えています。

昨年、我々が県内外13カ所の实地調査を行いました。その結果を改めて振り返ってみると、地域学習の実践には、1つ目に「地域とつながる、あるいは地域の人とつながる」ということに主眼を置くようなものがあります。2つ目には、「歴史とか文化とか課題など、さまざまな切り口から地域を知る」ということに主眼を置くものがあります。そして3つ目は、「地域課題と向き合いながら地域をつくっていく」ということに主眼を置くものがあります。こうした3つの側面が地域学習を構成する非常に重要な要素になっているのではないかと考えています。こうした考え方を、まずは冒頭に示してはどうかという案になっています。

その上で、具体的な方策として、資料2の1枚目下部に記載されている3点について提起したいと考えています。

まず1点目は、「地域学習を始められる環境づくり」です。もちろん地域学習を系統

的あるいは継続的に展開していくというのは非常に重要なことですが、それ以前に、「こうやってみたい」とか「面白そうだな」と思ったことを、こどもたちが気軽にチャレンジできる、始めることができるようにしていくことの方がむしろ大事なのではないか、そのための環境づくりをまずしていかなければいけない、というその必要性などについて提示していくイメージです。

続いて2点目の方策ですが、本審議事項が「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進」というところに焦点が当たっていますので、ここでは社会教育施設が実施しているような事業、いわゆる主催講座などに関わるような具体的な提起ということになっています。

3点目が、「地域学習の展開」です。地域の人々の「やってみたい」とか「面白そうだな」という意欲を大事にしながら進めるのは基本になりますが、地域学習をどういうふうに継続させていくのか、あるいは質をどう充実させていくのかと考えた時に、評価であるとか、きちんとこの実践を問い直していく、省察する、振り返るということも極めて重要になってくるのではないかと考えています。そうした評価や省察といった視点なども加えながら、地域学習をいかに展開していくことが大切なのかを述べていくイメージです。

以上が、審議事項1(1)に関わる現時点での案です。本日は、これを一つのたたき台としながら、委員の皆様から広く意見をいただいて、アレンジを加えたり内容を膨らませたりしていけたらと考えています。

例えば、地域学習の構成要素について、今は3つではないかと申し上げましたが、他にもあるのではないかと、あるいは少し変えたほうがいいのではないかと、という考えもあろうかと思えます。また、提示した3つの方策の柱についても、他にも付け加えるべき柱がないだろうか、あるいはこの柱は変えたほうがいいのではないかなど、いろいろと忌憚のない意見をいただければ幸いです。

特に、前回の社会教育委員の会議に出席されていた方は、議論を重ねながらこの案に至っているわけですが、社会教育委員を兼務されていない委員の皆様の意見をぜひ伺いたいと思います。

委員 (1)の「幼少期からの年代」と書かれていた点についてです。審議事項1自体は「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進」とされていますが、どうしても「こどもたち」というと生徒期や児童期をイメージしていました。しかし、(1)として「幼少期からの年代」と表現されていることで、幼児期のこどもたちにもこれは関係することなのだと、それも含んでいるのだということが明確になりました。公民館等の社会教育施設での地域学習の対象として、幼児期も含まれるのだということをしっかりと意識できるように内容を書くなど、より膨らませていけたらいいのではないかと感じています。

それから、方策の3つ目である「地域学習の展開」についてです。提示された3つの方策はいずれも関連性があり、しっかりした柱になって概念的なものがこれからどんどん膨らむと感じたので、3つの柱自体は大変良いものだと思います。ただ、この「展開」を書く段階において、地域の活動を展開したり周知したり、あるいは拡充し

て人とつなげていくために、今のこどもたちに響くもの、興味を惹くようなものを内容に盛り込められればいいのではないかと思います。

県外調査の報告にも、SNS の活用とか、公民館同士がつながるといった取組の報告もありました。今のこどもたちは SNS や Instagram といった媒体を活用しています。小さなこどもを持つお母さんやお父さんの年代も、こうした媒体に非常に興味を持って進んだ形で見えています。そうしたものも含めれば、もっと今の若い人たちやこどもたちに興味を惹きつける要素になると感じました。

会長 1 点目の、「幼少期から」となっている点についてですが、どうしても「こども」と言うと児童生徒をイメージしがちだけれども、もっと小さいこどものこともきちんと視野に入っているのだ、入れているのだということがしっかり伝わるようにすべきという指摘だと思いました。

例えば地域学習の 3 つの構成要素と言った時に、3 要素というのはこどもの発達段階や年齢段階に応じて、①から③へと広がっていくような部分もあるのではないかと思います。例えば、幼少期のこどもたちは、まずは地域の人と触れ合う、あるいはつながっていくというところからスタートしていく。そうしたことも大事な視点かなと思いましたので、「幼少期」というところの視点をきちんと位置づけていくべきと考えています。

続いて、展開のところで指摘いただいた、今のこどもたちが興味関心を抱きやすい部分やきっかけになりそうなところを大事にしなければならないという点、これも極めて重要な意見だと思います。もしかしたら、「事業づくり」や「機会をつくる」というところでそうした視点を盛り込んでいくことも大事なのかなと感じました。これから内容を詰めていく際、一つの視点として加えていきたいと思っています。

委員 「見出し」となると、その言葉自体の表現に囚われてしまうところがあります。特に（２）の「こどもたちの地域愛を育むための方策」の２つ目「こどもが意見表明・自己決定・参画できる環境づくり」という表現についてです。この「意見表明」という言葉が、表現としての硬さを一見して感じてしまいました。やはりこどもたちが考えを表すとか、表現をするといった、もう少しマイルドな感じの表現にできないものかということを感じていました。

会長 私の説明不足だったかもしれませんが、審議事項 1（１）、（２）、（３）と順に検討を進めてまいりたいと思っています。今指摘いただいた点につきましては、改めて、次の（２）を議論する際に、もう一度話していただければ大変ありがたいです。

委員 地域学習とか、地域の課題といった、「地域」という言葉が出てくると、何となく地域というものが確固として存在していて、それが非常に目に見えるものであるかのように、どこか勘違いをしながら話をしているような気がしています。おそらく「地域」というものは、形のないものであって、つまりそこで本当に暮らしている人がどのような人なのか、あるいは、そうした人たちが何を考えているのかということの集まり

が、おそらく日本語で言うところの「地域」や「社会」といった言葉になっていると思います。

地域学習の進め方を議論するのであれば、あるいは地域や人とつながると書くのであれば、よほどその「人」というものにフォーカスすべきではないでしょうか。例えばこのエリアであれば、このような人が地域を代表するロールモデルなのではないか、ということをしちんと決めなければいけないと感じています。そうでなければ、「色々な人間がいるよね」「色々な考え方があるよね」「じゃあ、解決した方がいいよね」という表面的な話で終わってしまうような気がしてなりません。

集落であっても学校単位であっても構いませんが、このエリアにおいて、どのような姿になるのがロールモデルとして相応しいと考えているのか、ということをお大人側がまず決めなければ、それはズルいのではないかと考えています。地域とはどうあるべきか、そして地域とつながると言った時に、誰とどのようにつながるのが良いのかということをお、お大人側がきちんと表明もせず「つなぐれ」とこどもたちに言うのは、少々厳しいのではないかとというのが考えです。

もう1点は、社会教育施設でやるべきことと、実は家庭や学校などでやるべきことの区別をつけずに進めるというの、学習を推進する上では少々無理があるのではないかと感じています。もしかしたら、社会教育施設ごとにそれぞれの役割が当然あるはずですので、それらの役割分担をもう少し明確にする、あるいは意思表示をするといったことがあった方が、地域学習を進めるという意味ではより進めやすくなるのではないかと思います。

会長 今の発言を受けまして、もう少し詳しく意見を聞いてみたいと思ったのですが、「地域の大人のロールモデル」については、どのような姿をイメージしていますか。それから、学校と社会教育施設、あるいは家庭も含めてですが、どのような役割分担がベースになるとイメージしているのか、少し紹介をお願いします。

委員 ロールモデルは、必ずしも特定の個人を指すわけではありません。例えば、ある地域では、「僕らはこういう地域を作りたい」という意思を持つことです。また、オーガニックな野菜や食べ物を作っている人たちが、「生き生きと暮らすような社会や地域を作りたい」といった方向性がロールモデルの一つだと思います。

そうした指針も何もなく、何となく「ここはいいところだよ」「ここで生まれたのだからずっとここにいなさい」と言うのは、こどもたちにとって酷なことではないかと思っています。我々がこの地域において、どのような大人になってほしいと考えているのか、「あのおじさんのように、あんなふうになれたらいいんじゃないの」ということを、お大人側がきちんと明確に提示することから学習をスタートしないと、やはりどこかズルいような気がします。

また、役割分担については、最大多数で合意ができるところを模索すべきだと考えています。学校がやるべきことは何かと言え、学校は最低限勉強さえ教えてくれれば良い、社会的なつながりの中で少しくらい喧嘩をしても良いと思っているし、しつけなどは本来、家がやるものだと思っています。しかし、今の時代がそうではないと

言うのであれば、大多数の合意ができるものをみんなで作っていく、その地域の合意が取れるものを作っていくべきではないでしょうか。

会長 「合意」というのは非常に大事な視点ですね。地域の大人のロールモデルという点に関しましては、審議事項1（2）において「大人の姿勢」というものを示そうという案になっています。今発言いただいたような内容をそこに位置づけていくということがあり得るかと考えましたので、改めてこの審議事項1（2）の検討の際に、もう一度発言をいただければと思います。

委員 非常にタイムリーな話なのですが、1月に八戸市の小学校におきまして、こどもたちに対する地域学習のようなものを実践してきました。地域の生涯学習ということで、冬休み中の5日間にわたって「冬休みこども体験プログラム」というものが開催されました。これは私の友人が行政と一緒に企画したもので、私はアート部門の講師として、こどもたちに粘土で自分の名前を作るワークショップなどを担当いたしました。

この活動を通じて、役割分担について考えさせられました。学校教育でできることと、長期の休みなどを利用して、外部の人間が来て地域の人とこどもたちをつなぎ、普段の学校では体験できない「餅つき」や「アート体験」を共に行うというのは、とても素晴らしいことだと感じました。このプログラムでは、私が教えたアートの他にも、伝統文化である餅つきやえんぶり体験、さらに英語や日本の文化など、多様な体験をこどもたちに提供していました。

定期的なアフタースクールにおいてこうした学びの場を設けることももちろん大切ですが、役割分担という視点で考えれば、学校が行う活動と、地域が担う活動を分け、長期休暇の時期に合わせて開催するという手法は、非常に持続可能なのではないかと感じました。こうした場所を設けて集まるという活動は、他に仕事を持っている社会人にとっても参加しやすい形であると考えました。

会長 こどもたちは、学校がある時期は一日の大半を学校で過ごすわけですので、学校が長期の休みである時は、まさに社会教育の出番であると言えます。そうした時期に応じた役割分担のあり方というのも、一つの方向性としてあるのではないかと感じました。

委員 私からは「地域学習の機会づくり」という部分で、体験を通じた学習、アウトプット型の取組について一言言及させていただきます。

もちろん体験やアウトプットを行うこと自体は非常に大切なことだと思うのですが、学校教育の中などでは、地域の課題に対して解決策を提案してそれで終わり、というパターンが非常に多いように感じています。そこをもう少し踏み込んで、実際の「実践活動」とか、実践型の学習というものを取り入れていくべきではないでしょうか。そうすることで、地域学習の機会という部分におけるバリエーションがより広がるのではないかと考えています。単なる「体験」から一歩進んだ「実践」というところまで内容に含まれてくると、より良くなるのではないかと思います。

会長 地域学習の構成要素の3番目「地域をつくる」が、まさにその部分にあたると考えています。単なる体験や提案に留まるのではなく、実際の「行動へ」というところを意識した、ダイナミックな学びの展開を描いていくこと、そのことが肝要であると感じました。

委員 表現に関わる部分なのですが、「地域学習」という言葉自体は、必ず入れなければいけない概念なのではないでしょうか。議論の前提として、まずその点を確認させていただきたいです。

会長 諮問事項におきまして「地域学習」という言葉が明確に示されていますので、やはり基本的にはこの言葉に即して議論を重ね、答申を出していくのが基本線であると考えています。

委員 私個人の感覚の話になってしまいますが、「地域」というものと「学ぶ」ということ、そして私の中で「学習」という言葉になりますと、どうしても「授業」のようなイメージを抱いてしまいます。教えてくれる人がいて、それを受けて、あなたはどうしますかと問われるような、どこか受け身のイメージを受けてしまいます。

そのため、シンプルに「学び」といった表現にした方が、私としては自然なように感じられたのですが、これは人によるものだと思います。教育のプロの方々が集まっている場ですので、皆様の立場から見て「地域学習」という言葉が自然であれば問題ないと考え、確認させていただきました。

もし「学習」という言葉を用いるのであれば、骨子の中では「地域学習」というものをこのようなものとして捉えています、という注釈のようなものが入っても良いのではないかと感じました。せっかく社会教育や生涯学習的なところは、学校とは別の学びが前提としてあるはずですので、学校のようになってしまうと重複する部分も出ますし、少しもったいないのではないかと思います。

会長 本案では「地域学習の構成要素」という表現で整理を試みっていますが、やはり地域学習についての答申が求められている以上、審議会としてこの言葉をどう捉えたのかということを示していくことが重要だと改めて感じました。

「地域」も「学習」も、まさにマジックワードと言いますか、それぞれの立場の方が様々なことを話していて、非常に掴みどころのない言葉になっているのが実態かと思います。難しい部分ではありますが、少なくとも我々としてはどう捉えたのか、ということ示すべきであると考えました。

委員 ただいまの話とリンクする部分があるのですが、こども家庭庁では「はじめの100か月の育ちのビジョン」を出しています。そこでは、こどもの主体性を軸として、身近なところでの出会いや体験を通じて「いつの間にか自分が変わっていた」という経験、これこそが「学び」であると捉えています。そのような視点で見えていくと、地域学習の理解も少し落ち着くのではないかと感じていました。

もう1点、方策についてです。大枠で3つの方策が示されていますが、やはり「こういうことをしてほしい」というニーズ、それから「何かやってみたいけれど何をしたらいいかわからない」という人材、そしてそれらを合わせた活動、これらを結びつけられるような「仕組みづくり」まで踏み込めないかと考えています。ニーズ、人材、活動を結びつける仕組みづくりを行うという方向性があれば、提示された3つの方策もよりリアリティが増し、実現可能性が高まるのではないのでしょうか。

会長 仕組みづくりについては、方策の1点目である「環境づくり」と深く関わってくる部分かと思います。環境を支える、あるいは環境の土台になる仕組みを描けるような具体的なイメージを紹介いただけますと幸いです。

また、学びの捉え方については私も全く同感です。子どもたちが周りの環境と相互作用を及ぼし合いながら自分を変えていくこと、そして地域学習においては、地域の人との関わりの中で自分を変えていくこと、それこそが学習の本質であると考えます。こうした硬い表現では伝わりにくいかもしれませんが、子どもにも伝わるような表現で地域学習をどう捉えるかを示せればと改めて思いました。

委員 先ほどの発言にあった「アウトプット」についてです。アウトプットが参加している子どもたち同士の相互作用のようなものであれば良いのですが、その場で何かを作り出さなきゃいけない、あるいは答えを出して自分の考えをまとめなければいけない、といったアウトプットを強いる必要が本当にあるのでしょうか。

特に幼少期からの取組ですので、こどもの頃には気がつかなかったけれど、大人になって社会に出て、あるいは地域の外に出て初めて気がついて、そこでアウトプットできるようになることはたくさんあります。そのようになってからのアウトプットの方が、質が良くなるはずですので、この短期間でアウトプット型の何かを求めることは、少し危険なのではないかと感じました。

会長 確かにそのとおりだと思います。大人になってから幼い頃の経験が生きてくることこそが、本当の意味での地域学習の成果につながるのだと感じました。

実は今回「アウトプット」という言葉を用いましたのは、実地調査での高岡市の福岡公民館の取組に基づいたものです。そこでは、地域の魅力をインプットされるだけでなく、学んだことをクイズにして他地域の子どもたちへ発信する、といった活動が行われていました。単に溜め込むだけでなく、外に発信することでより自分のものになっていく、というイメージから挙げたものです。

ただ、アウトプットという言葉については、より広く、慎重に捉えていくべきであると考えました。

委員 まず、「地域」とか「学習」といった言葉についてですが、一人の一般市民として、すんなりと心に入ってこない感覚があります。「地域」とか「社会」という表現を使った時点で、どこか他人事のように感じられてしまうような気がしています。それほどまでに、「地域」「社会」「学習」という言葉は、一般市民の感覚からすると、どこか通

り過ぎてしまうような、距離のある感覚があります。しかしながら、本審議会は諮問に対する検討でありまして、「地域学習の推進について」という明確な言葉が掲げられていますので、ここはやはり「地域学習」という言葉を使っていくべきであると考えています。

その上で、(1)の「幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」における、①②③の構成要素については、「地域とつながる、人とつながる」、そして「知る」、さらに「つくる」という3つの柱で良いのではないかと考えています。また、順番につきましても、今の順序が適切であると感じています。特に「地域とつながる」という部分に、あえて「人」という言葉を入れている点が、非常に重要なのではないのでしょうか。

先日、石川県穴水町の穴水中学校の生徒さんたちと、交流する機会がありました。能登半島の震災を経験した彼らと話をする中で、「大好き穴水」「自分たちが守っていく」という言葉が何度も聞かれましたので、災害が起きる前と、起きた後の今では、どちらの方が穴水を好きという気持ちが大いなのかと質問をしてみました。彼らは「今だ」と言うのです。どうしてなのかと尋ねると、「たくさんの人が支援に来てくれて、たくさん助けてもらった。その支援をしてくれた人たちと接しているうちに、守ってもらった穴水を、今度は自分たちが守っていくんだという気持ちになった」と教えてくれました。これは、失いかけた街を見て、改めて大事だなと尊さを感じたということだけではなく、やはり一番大事だったのは「人と関わること」だったのではないかと思います。地元の人はもちろんですが、外から来た支援者の方とも関わり、自分たちの街に関わる活動や行動を共にしてきた中で心が育ち、様々なことに気付いていったのだろうと感じています。

ずっと私の心に残っているのですが、「自分の地域を好きなのか、どちらかといえば好きなのか」というアンケート結果がありました。それが「大好き」に変わっていくためには、やはり心が育っていくうちに「好き」という感情が生まれ、それが表現へと変わっていくものなのだと思います。

ここでの「つながる、知る、つくる」の中で最も肝要なのは「人とつながる」ことではないかと感じています。そうした心の育った人間が地域を作り、社会のリーダーになっていく。それが持続可能な社会の作り手の育成や、ウェルビーイングにまでつながっていくのではないかと思います。

「公民館等の社会教育施設における」という点に特化した考え方として、この3つの構成要素はこれで良いのではないかと思います。また、若い人たちに響くようなSNSやInstagramの活用なども具体的に示していくことも、一つの方法ではないでしょうか。

会長 審議事項1(1)に関しましては、一旦ここまでとしたいと思いますが、委員の皆様いかがですか。「地域学習とは何であるか」といった前置きを冒頭に配し、その後に柱として3つの方策を打ち出していく、という方向性で概ね了承いただけますか。

その具体的な中身につきましては、本日色々と発言いただいた内容を、適宜、適切な場所へと盛り込んでいく、そのような形にしたいと考えています。よろしいでしょうか。

全委員 意義なし

会長 ありがとうございます。それでは、(1)についてはここまでとします。

(休憩)

会長 続きまして、審議事項1 (2)に移ります。(2)の柱は、「こどもたちの地域愛を育むための方策」です。ここではまず冒頭に、地域愛を育むというのはどういったことなのか、審議会としての基本的な考え方を述べるようにしてはどうかという案になっています。

ここでは、若者を県内に定着させるために地域愛を強要しているのではないか、というような誤解を生じさせないようにすることが大切です。こどもたちが「ここに生まれてよかった」と実感を伴って捉えられるような地域を作っていくことこそが重要なのであって、むしろ大人側の意識や行動が問われているのではないか、ということも含めて記載してはどうかという案です。

その上で、3つの方策を提起できればと考えています。まず1点目は、「地域を愛し楽しむ大人の姿勢」です。これについては冒頭の記載とも関連いたしますが、社会教育施設で働いている職員の方々も含めた大人側に求められる姿勢について触れたいと考えています。

続いて2点目は、「こどもが意見表明、自己決定、参画できる環境づくり」です。ここでは「こどもまんなか社会」や「こどもまんなか青森」、その土台となっているこどもの権利条約の理念に基づき、こどもの意見表明や参画の権利が尊重されるような地域、あるいは社会教育施設の環境づくりについて述べていこうという案です。

そして3点目は、「こどもを主役とした学習機会、事業の充実」です。大人たちが善意で「これがこどもにとって大事だ」と決めて事業を組むのではなく、こどもを主人公とし、こどもの声や「やってみたい」という思いを軸にこどもとともに事業を作っていくことが、こども主体の学びの機会につながるのではないか、ということを提起したいと考えています。

委員 先日、地域の小学生や中学生から「自分が町長になったら」といった提案を受ける機会がありました。今のこどもたちは、若いうちから学校で地域の課題などを勉強しているようですが、その際に「町長が中学生の時、何を考えていましたか」という質問を受け、改めて自分のこども時代を考えてみました。

私は東京育ちですが、今のこどもたちが青森から出ていきたいと感じるのと同様に、当時は日本から出ていきたいと考えていました。自分を正しく評価してくれる場所へ行きたいと、アメリカ留学を計画していました。しかし、留学に当たって「日本人なのに日本の文化を知らないのは恥ずかしい」という文章を読み、お茶を習い始めたところ、日本文化が非常に楽しくなり、逆に大学では日本文化のゼミに入るほどになりました。

私が感じているのは、学校の先生方は「地域を愛しなさい」とは話すものの、日本

そのものを愛していない方が多いのではないかと、ということです。日本古来の豊かさや美しさに触れることがどこか敬遠され、「地域は愛しましょう」と言われることに、矛盾を感じていました。

地域を愛することは、「20代は自分のこと、30代は家族のこと、40代は地域のこと、50代以降は国のため」というように段階を経て広がっていくものだという考えに私も納得しています。そこを恥ずかしがらずに、触れて学ばせることも大事なのではないかと感じました。

会長 本審議会の中でも他委員から出されていた「世界や地域の外に目を向けることが、結果として地域の魅力に気付くきっかけになる」という話とも通ずることであると感じました。

委員 学校現場としての視点で考えていました。先ほど「社会教育施設における」という点を強調していたため、私自身の考え方を改めて整理しているところです。

「ふるさと愛」を育む教育については県の教育方針にもありますので、現在は何の学校においても、ふるさとを教材にしたり、ふるさとについて学んだり、ふるさとの中で学んだりといった取組をたくさん行っていると思います。学校教育においては知ることから始まって、地域とのつながりに向かっていったり、つながりを持ちながら地域を学んだり、ということ積み重ねているのではないかと考えていました。多様なふるさとを知ることで、地域の良いところを見つけ、自分たちの住んでいる場所を愛する気持ちを育てよう、といった発想で取り組んでいるのではないかとということです。

また、国際理解という形でも、世界の様々な国を知ろうという活動は行っています。ただ、それらを最終的にどのようなビジョンへ持っていきたいのかという点については、学校教育の中で明確な一貫性を持って取り組んでいるわけではない部分もあります。そのため、こどもたちの「何を育てたいのか」というところが重要なのではないかと思います。

本校でも「町長と語る会」を実施していますし、他地域でも「こども議会」など様々な試みが行われていると思います。しかし、町を良くするためにとこどもたちが提案をすると、どうしても「アミューズメントパークを作る」といった発想になりがちです。小学校で取り組んでいる中では、その町の良さを活かし、「うちの町でしかできないこと」という次元まで持っていくことが、なかなかできていないのが現状です。先ほど「実践」という話がありましたが、提案までは行うものの、それが現実になるかどうかというところまでは手が届いていない、というあたりに難しさを感じています。

「社会教育でやること、学校教育でやること」という話もありましたが、学校教育としてどこまでを担えばいいのか、改めて考えていました。

次に、大人が地域を愛する姿をこどもに見せるという点についてですが、私が強く感じているのは、今のこどもたちの親世代が、あまり地域のことに興味を持っていないのではないかとということです。地域の親世代より上の方々は一生懸命に「こどもたちのために」と活動してくださっていますが。

情報提供のアンケート調査を見ますとお祭りの参加率は非常に高く出ていました。これはおそらく、地域全体に「お祭りに参加しましょう」という流れがあり、小・中学生が出てくれないとお祭りが成り立たないという事情があるためだと思います。学校としても、強制ではありませんが、学校内で「祭囃子教室」を行うなどしています。本校では各町内に児童を割り振ってお祭りに参加していて、その中でがんばっている大人の姿を見て、大学進学後も「お祭りの時に戻ってきて協力したい」という心を育んでいる子どももたくさんいます。こうした活動があるからこそ、アンケートの結果でもこの項目が高い数値になっているのだらうと考えました。ただ、お祭りなどに際して、親が自ら力になろうとしたり、「子どもが出たいと言うから一緒に参加しよう」と考えたりする環境を築くことは、なかなか難しいということです。

PTA 活動も、現在は組織自体がなくなっているところが増えていますが、活動を継続している場合でも、例えば「文化祭で子どもたちのために手伝おう」とか「除草作業に参加しよう」といった姿勢を引き出すことは、どんどん難しくなっています。保護者の協力が得られないことを理由に「あれもやめよう、これもやめよう」と、事業を縮小せざるを得ない時代です。「地域のために」「子どものために」という「大人の姿」を見せることが大事だとは思いつつも、現実是非常に厳しいと感じています。

会長 方策の1点目として「大人の姿勢」を提案していますが、非常に難しい課題であると改めて思いました。今、発言して下さったような、そうした葛藤が当然出てくるものですので、その書きぶりをどうすべきか、考えさせられたところです。

また、発言の冒頭にありました「ふるさとで学ぶ」「ふるさとを学ぶ」という表現も、大変重要な視点です。ふるさとを地域と捉えるならば、地域学習には「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」といった、多様な捉え方があるのだと改めて気付かされました。

あわせて、「町長と話をする機会」や「子ども議会」についてですが、これらはこどもの「意見表明」という観点から非常に大切なことです。一方で、こどもの意見表明において、こどもの権利条約などで求められているのは、大人側が「応答責任」を果たすということです。それがこどもの権利を支える大事な条件になります。大人の姿勢を問うならば、こどもが表明した意見をきちんと聴くことはもちろんですが、単にそれを受け入れたり採用したりするだけでなく、なぜ取り入れられないのか、なぜ決定に反映されなかったのかという点も含めて、こどもに理解ができるようにフィードバックしていくことが、姿勢として求められるのではないのでしょうか。本当に難しいことではありますが、「大人の姿勢」という言葉を用いる際には、こどもの権利条約のような考え方に依拠しながら、葛藤しつつも整理していくことが大切になるのではないかと考えました。

委員 一人の保護者の立場として少々胸が痛む思いでした。私たちの年代は、こどもが小さい頃に町内会へ一度は参加した経験があるものの、こどもが小・中学校になると部活動の地域移行などの影響もあり、土日も含めて送迎等に追われる日々です。そのため、町内会が活動している時間帯には、地域にほとんどいられないという状況が続い

ています。一方で、PTAなどでイベントを企画し呼びかけますと、多くの方に集まっていただけの土壌はありますが、かつてのような賑わいに比べれば、参加者は少なくなっているのが実情です。ただ、私たちの地域では今も小さなグループを作って人を集め、こどものためにイベントを開催するといった活動を継続しています。私自身、部活動の指導にも携わっていますが、こどものために動いてくれる大人の方は今も大勢います。そのため、骨子案にあった「楽しむ大人の姿勢」を見せることは非常に大切だと感じます。やらされている感じではなく、大人も巻き込んで一緒に楽しくやっていけたら素晴らしいことだと思います。

持続可能性という点では難しさもありますが、成人式で都会から戻ってきた若者たちが「この地域でがんばっていきたい」と表明するのを聞き、私自身、大きな期待を抱きました。そうした子たちが戻ってこられるよう、私たちも居場所や役割を作ってつないでいかなければならないと強く感じています。地域に根付いていくためには、そうしたプロフェッショナルな方々が育つことが重要ではないでしょうか。

会長 こどもたちが地域に「居場所」や「役割」を持っているという視点は、本答申において欠かすことのできない極めて重要な要素であると感じました。

委員 方策の言葉選びにつきまして、2点ほどアイデアを共有させてください。1点目は、1つ目の方策にある「地域を愛し楽しむ」という表現についてです。この言葉は非常に美しいのですが、果たして全員がそのような状態になれるのだろうかと考えた時、現実との乖離が生じ、かっこいい言葉だけが並んでしまう気がします。むしろシンプルに「地域で生きる大人の姿勢」といった表現の方が、より多くの人に伝わるのではないのでしょうか。

2点目は、2つ目の方策にある「意見表明」という言葉の順序についてです。先ほど言葉が強いとの指摘がありましたが、私も同様に感じています。本来の順序としては、まず「自己決定」があり、その上で「意見表明」ができ、最終的に「参画」へとつながるものではないのでしょうか。言葉の問題ではありますが、この順序を整理した方がより自然であると感じました。

会長 1点目の「地域に、地域で生きる大人の姿勢」という表現への変更、そして2点目の「自己決定、意見表明、参画」という順序の整理、いずれも非常に妥当な提案をありがとうございます。「意見表明」という言葉につきましては、こどもたちが自らの意見を形成できるような場づくりや関わり方がセットで求められますので、そうした背景も含めて打ち出していく必要があると思っています。

委員 1点目は、特別支援教育の視点から「自己決定」を可能にするステップについてです。障がいのある方々の自己決定を支援する過程では、まず「安心・安全な環境」があり、次にメリットやリスク、代替案などの「情報が保障」されていることが不可欠です。その上で「意思決定（自己決定）」を行い、その結果が期待どおりであれ、期待と異なるものであれ、それを「フィードバック」として受け止めていくというループ

が重要になります。このステップを意識することで、こどもたちの主体的な学びにおける抜け落ちを少なくできるのではないのでしょうか。

2点目は「大人の姿勢」についてです。「地域で生きる大人の姿勢」という言葉は、ふさわしい表現だと感じました。私自身、学校の「おやじの会」のメンバーですが、「こどものために何かしなければ」と重く言われると躊躇してしまいます。しかし、一人では無理でも、誰かを引っ張ってくるのが得意な人がいて、その連鎖の中でやってみたら「やってよかったね」と思える、そのような姿です。あまり背負いすぎず、しかし結果として面白いことが起きていることを示せるような表現になればと考えています。

会長 実地調査で出会った方々の姿もまさに「地域に、地域で生きる大人の姿勢」を体現していました。肩に力を入れず、多くの人に伝わる表現で示していくことが肝要であると改めて感じました。

委員 先ほどのロールモデルの話とも関連しますが、「地域を愛している大人の姿を見せる」と言った時、その「愛し方」にも多様性があるべきだと考えます。こどものためだけに活動している人だけが地域を愛しているわけではありません。こどもから見て嫌な大人であっても、その地域を支えている場合もありますので、何をもって「地域を愛している」とするのか、その定義を慎重に考える必要があります。

また、方策の2番目や3番目についてですが、ともすれば大人の「下心」が透けて見えてしまうと思います。こどもに意見を言わせよう、参画させようという大人の意図に、こどもたちは敏感に気がついてしまうのではないのでしょうか。

例えば食育の授業などでも、あらかじめ切られた食材をただ調理するだけの体験は、消費者教育にはなっても、地域を愛することにはつながりません。魚をさばくところから、あるいは買い物から、しっかり時間をかけて向き合うことこそが重要です。学校教育では時間の制約で難しい部分もありますが、社会教育施設であれば、長期の休みなどを利用してそうした役割を担えるのではないかと感じています。

会長 先ほど「下心」という言葉がありましたが、私はこれを下心と捉えるのではなく、真にこどもの人権、および基本的権利として、こどもによる意見表明や参画を明確に位置づけていかなければならないと考えています。「参加」や「参画」という言葉を用いる際、先ほどの料理教室の例のように、実態を伴わない単なる「お飾り」として使われるに留まってはならないと感じています。そうした表面的なレベルを超え、真の意味での参画を打ち出し、目指していくことこそが、この部分において重要になるのではないのでしょうか。

審議事項1(2)に関しては、まず冒頭において「地域愛を育むこと」について、当審議会としての何らかの見解を示すこととします。その上で、方策の柱として3点について提示します。表現の調整については、1点目に関する提案があったほか、2点目についても順番の入れ替えや、表現を少し柔らかくするといった意見をいただいています。おおよそ、これら3つの柱に沿って答申をまとめいくということについて、

異議はありませんでしょうか。

委員 1点よろしいでしょうか。こどもたちに対して地域愛を育むことは、絶対に行わなければならないことであり、そのために尽力するのは当然のことです。しかし、その前に、現在の子育て世代が、地域愛の薄い世代なのではないかと感じています。いわゆる就職氷河期世代として、失われた30年の中で10歳から40歳までを過ごしてきたという事情があります。「あなたには代わりがいる」と言われ続けてきたこの40年間の感覚が根底にあります。自分自身に対しても、あるいは地域や周囲に対しても、「価値がない」と思われてきた人々が、今ちょうど子育て世代となっています。その中でも子育てができている方々は、いわば「勝ち組」として愛情をかけて育てられるのかもしれませんが、そうではない独身の方などが、地域愛を育む枠組みの中に入るタイミングはないのかもしれませんが。このように、誰に対しても愛情を持ち得ないような大人もまた、地域の一員です。今回の議論において、そうした存在が蔑ろにされているわけではないでしょうが、少し見えなくなっているのではないかと感じています。

会長 方策の1つ目に関わっての実態であり現実であるという観点からの指摘でした。

委員 議論を混乱させてしまうかもしれませんが、様々な方から受ける話を踏まえての発言です。自分の地域を愛する前に、まず「知る」というプロセスにおいては、言葉は強いですがある種の「破壊」のようなものが必ず伴うのではないかと考えています。生まれ育った地域しか知らない状態では、そこにある環境があまりに当たり前すぎて認識できません。私個人の感覚としては、現在は怪我や心配事も少なく、非常に良い世の中になっていると感じています。もちろん人によりますし、大変な境遇の方がいることも承知していますが、平均的には「普通に育ってしまう」ような世の中です。しかし、その平穏な日常は、これまでの大人たちの努力や、権利を勝ち取ってきた人々の積み重ねの上に成り立っているものです。その背景を知らなければ、現状を当たり前だと思い、自分が主体的に何をするかという実感を持つことは難しいのではないのでしょうか。したがって、自分の地域の特徴を知ることは不可欠ですが、同時にその環境が他と比べてどうなのか、例えば「日本が嫌で海外へ行きたい」「東京へ行きたい」といった相対化も、一つの「破壊」の形であると考えます。また、能登半島の事例のように、地域を失うかもしれないという明確な「破壊」に直面した時、初めて気づくことも多くあります。

方策として「破壊」という言葉をそのまま入れることは適切ではないかもしれませんが、自分の環境が良くも悪くも「当たり前ではない」ということを知る視点、あるいは他と比較できるような視点が必要ではないのでしょうか。これが3つの方策のどこかに入るのか、あるいは別のテーマとして立てるのはバランスの問題かと思いますが、安心安全を前提としつつも、それと両立する概念として、ある種の危機感のようなものが入っても良いのではないかと感じています。

会長 「地域を作る」とは、すなわち「地域を変える」ということであると考えました。

今の地域は、かつての大人の世代が当時の何かを変えながら作ってきたものです。そこにきちんと目を向け、現状を「当たり前ではない」と捉えることは、当然あるべき視点です。こどもたち自身も、外の世界に目を向け、多様な視点や価値観を吸収しながら、今ある地域を変えていく。「破壊」という言葉は確かに強いですが、そうした「変えていく力」をこどもたちが育み、培っていくことは極めて重要だと感じました。指摘の視点は、どこに位置づけるかは検討が必要ですが、盛り込まれるべきものであると認識しました。

それでは、本事項（２）については一度閉じます。まずは冒頭に、地域愛を育むことに関する審議会としての見解を示します。その上で、方策の柱については、この３つの構成で進めることでよろしいでしょうか。今後、皆様から出された意見を盛り込みながら、言葉を適宜アレンジして中身を構築していきます。

委員 助詞の使い分けについてですが、「地域に」ではなく「地域で」とすると、特定のエリアを指すような意味合いが強まります。一方で、地域の文化や歴史を対象とするのであれば、「地域に」という表現が適しているのではないかと考えます。

会長 私自身も「に」か「で」か、非常に迷うところです。助詞一つで意味合いが変わってきますので、この点は一旦保留とし、改めて骨子を示す中で、どちらがより適切か再検討させていただきます。

それでは、最後の項目になりますが、審議事項１（３）です。こちらは、「地域の大人たちの学び・活動の成果をこどもたちの地域学習に生かすための方策」ということで、審議が求められている部分になります。（３）については、冒頭に「地域を愛するとはどういうことか」といった趣旨の文章をあえてつけることは、特に考えていません。３つの方策を示すというイメージです。

方策の１点目は、「大人とこどもたちが共に活動し、語り合う場の創出」という柱になります。学びや活動の成果をこどもの地域学習に生かす、と言いますと、少し肩に力が入った表現というか、ハードルが高いように感じられてしまう懸念があります。例えば、お祭りなども含めて、大人が地域で活動し、あるいは活躍しているその場や機会に、こどもも一緒に関わることができるようにしていく。そして、大人の姿に触れながら一緒に活動をするを通じて、大人の背中から地域を知り、学んでいくといったイメージがこの中に含まれています。また、地域の中にはいきいきと働いて生きている素敵な大人がたくさんいます。そうした大人とこどもが出会って、働くことや生きること、地域の事柄について率直に語り合えるような場づくりを意識的に進めていくことも、この１点目には含まれてくるイメージです。

続いて２点目の「地域サークル、団体の方を講師にした地域学習の機会づくり」についてです。これは審議事項１が「公民館等の社会教育施設において」ということでもありますので、一つ公民館事業を念頭に置きながら挙げたものです。皆様も納得いただけたところと思いますが、地域はまさに「人材の宝庫」と言われます。様々な特技や専門性を有している方が実はたくさんいます。これまでも公民館等で人材発掘は進められてきたと思いますが、改めて地域人材を発掘し、その人材とつながりながら

事業づくりに取り組んでいくことを提起できないかということです。

3点目については、「学校運営協議会や町内会などの仕組みの活用」です。既存の仕組みを生かしていく方法もあるのではないかと、という案になっています。

委員 方策の2つ目「地域サークル、団体の方を講師にした地域学習の機会づくり」についてです。今、公民館事業を念頭に置いた話がありましたが、私が実地調査で2件ほど行った際にも感じたことがあります。やはり、地域を牽引してくれるキーパーソ的な人や、魅力あるテーマがあるかどうか、活性化するかどうかの分かれ目になります。しかし、「こういう人をどうすれば見つけられるのだろう」と実地調査中も切実に思いました。実際の公民館事業や自分の町を考えても、現状では高齢化が進んでいて、「人材がいないのか、見つけられないのか」と突かれると、ちょっとお答えができない状況です。そのため、現実にはどうなのだろうと思っています。魅力的な人がいて、こどもたちを巻き込んで共に活動していくというのは本当に良い方策ではありますが、この報告をまとめたものを読んだ方々がどう捉えるのかなという点において、私自身が感じたこととして非常に心配に思いました。

会長 確かに人材の発掘と言われると難しいです。ただ、ちょっと見方や視点を変えますと、地域に暮らしている人は皆、優れた人材になり得る可能性を有している人たちばかりなのではないか、という捉え方もできるのではないかと思います。そうした人たちが活動の担い手になり、人材になっていける道筋を何か支援できないか、作ってあげられないかというふうに思っています。

委員 例えば、地域ですでに行動力があり、積極的に活動をしている方がいるとします。素晴らしい方々ですが、じゃあクラスのメンバーが全員そのような方々だったら、まとまらないわけです。そうではない人もいるからこそ、世の中は回っています。しっかり継続することや、ルールを守ることが良いことだと思って過ごす人もいます。一方で、行動力がある、思い付きが豊か、発想力がある、あるいは少し多動で衝動性があるような方も、メンバーとして存在します。そこをどう把握し、どう生かすかというところです。その中から形にできそうなものをつなぐ人とペアにさせるような形を目指していきたいなと思います。上手くいっている時は、アクティブな人の周りにそのようなつなぎ役がいるなと感じます。

私どもの「おやじの会」も、小・中学校を卒業してからも居ていいよ、というふうにしてから、ここ2、3年は非常に良い状態になっています。一言で言えば多様性ですが、特にアクティブな人と、アクティブじゃない人との組み合わせを大事にするということなのかなと思っていました。

会長 前に出て話をするのが得意な人ばかりではないのは当然ですし、地域には様々な方がいます。裏方になって取組を支えることが得意な人、性分に合っている人、そういった色々な人たちの歯車が上手く噛み合っていくことが大事なのだという指摘、確かにそのとおりだと思います。

見方を変えれば、先ほど「地域みんなが人材になり得る」と話したのは、先ほどの発言のような意味合いと、もう一つは、様々な生業や仕事をされていけば、その仕事の分野ではその人がプロであるということです。趣味や色々な活動で、学校の先生が持っていないような知識や技術を持っている人も地域にはたくさんいます。そうした観点から見れば、色々な方が人材になり得ると言えますが、ただ、そうした人をどう見つけてくるのか、持っているものをどう子どもたちにつないでいくのかが、やはり難しい部分なのだと思います。しかし、そこは大事な、やらなければならない部分であると考えています。

委員 先ほどの「破壊説」からいきますと、地域の大人たち、あるいは今までの良いとされてきた地域の大人たちの学びや成果を子どもたちに押し付けても、子どもたちが新しいものを創造することはできないと考えています。「講師がいない」と話していたのもそうですが、今まで良しとしてきた常識的な、何となく「いい感じの人」だけの成果や活動を、「これが大人のものだよ、地域で良いとされていることなんだよ」と提示するようなどころから一歩前に出ないと、次の子どもたちの地域学習にはならないのではないのでしょうか。

時代も価値観も変わっていて、これから生きていく子どもたちの日本は、我々が生きてきたときとは全然違うところに進んでいくわけです。それを大人側がしっかり受け入れて、「自分たちがやってきたことが正しいのだから、お前たちも俺たちを踏襲していけ」というところから一歩出さなければならないと思います。

(2)の項目で議論された「自己決定して意見表明し参画する環境」をつくり、そこに大人が乗っかっていくというふうに、流れを逆回転させた方が良いのではないかと、話を聞いていて思いました。子どもたちが選べるようにするということは、とても大事なことです。

会長 これをロールモデルにするのだ、ということをお大人が勝手に決めつけてしまわないということですね。

委員 先ほどの発言を受けてですが、「今までこうやってきた」ということをまずは学んで、それを受けて子どもたちが自己決定し、意見表明をする。その上で「じゃあどうする？」というのを、これまでやってきた大人と、「これもできるのではないか」という子どもと一緒にやっていけるような場面が作れたら一番良いのかなと思いました。それを考えさせるためにも、これまでやってきたことを知るということは、やはり大事なことだと思います。

会長 今の議論の中で、方策の1点目「一緒に語り合う場の創出」という中身が、少し立体的になり、見えてきたかなというふうに思いました。

委員 地域というと、地域コミュニティで仲良くしたり学び合ったりすることはあると思いますが、全体としての「地域」や「大人たちの学び」というのは、今は漠然として

いて、どこを切り取れば良いのかと考えていました。地域愛についても、比較対象がないとその良さも分からないと思います。大人とこどもが一緒になって何かをする時に、普遍的なつなぎ止めるもののようなものがないといけないと思っています。

「地域とは何か」と考えていたのですが、八戸に帰ってきてやっとその良さが分かりました。青森県の良さもあるけれど、なぜ弘前や五所川原にいないのかと言えば、例えばあちらは雪が多いからといった理由もあります。地域の祭りなどのカルチャーやプレイヤーも大事ですが、天気や食べ物といったことも重要になってくるのかなと思い、そういうことを大人たちも学ばなければいけません。

また、歴史のような壮大な話になりますが、私は拠点をリノベーションして活動していますが、父から名義変更をする際に調べていたら、地番と建物の住所が違うといった色々な歴史が出てきました。明治時代からこの土地がどう引き継がれてきたかが見えてきたのです。そうなった時に、少し上の世代や、さらに上の中心街にいた人たちに聞くと、八戸の歴史がどんどん出てきて学べます。今は「大人とこども」と二極化して言っていますが、実際にはこども、親世代、さらにその親世代がいます。多世代が意見交換する場所で、おじいさん・おばあさんから学び、働く世代が学び、大人がこどもたちに学び、というふうに、この関係を三段階にしたりするとまた面白いのではないかと思います。漠然としていますが、いわゆる「大人」も「すごい大人」から学ぶようなシステムができれば面白いと思います。

会長 大人と一言と言っても様々な世代があるわけで、その世代間の交流、共に世代を超えて学び合い、語り合う場を創出していくことが大事なのだと思います。大人と言っても18歳以上はすべて大人になりますので、そこら辺も丁寧に捉えていく必要があると感じます。

委員 社会教育委員の会議でも、「(3)は難しい」という話だったなと思って、ずっと考えていました。この方策に関しては、もしかしたらレイヤー（階層）がまた違うのではないかということです。

(2)の方策「地域に、地域で生きる大人の姿勢」を見せていくという中に入っていることが、(3)の方策として言えてしまうような気がしています。大人の姿を見せる時の、一つのやり方として(3)の方策があるようなイメージです。大きいタイトルがあって、方策があって、その下にある具体的なアイデアという構造になるはずですが、(3)に関しては、方策が抜けて急にアイデアベースの内容になっているように見えてしまったので、前回の会議で考えるのが難しいと感じていたのだなと、今気付きました。

そう考えた時に(3)の方策のレイヤーとしてあった方が良いものは何かと考えますと、世代が変わっていく中で、前の世代の人たちが作ってきたものを紹介し、知識を入れる。そしてこどもたちがそれをどう生かすかを自分たちの今のフィールドに入れていくための「機会」のようなものがあると良いのかなと思います。この方策の段階だと、大人とこどもが同じ時間、同じ世界を共有しながら一緒にどう作っていくかという話が入っている気がします。せっかく大人とこどもで分かれていますか

ら、この世代間というところに注目すべきです。

ずっと昔から「今の若い者はダメだ」という話が残っていると言われますが、あれは非常に本質的で好きなテーマです。ただ、あれは「若い子たちをどう捉えるか」という、大人側の都合の話でしかないと個人的には思っています。教育や時勢、技術が変わって今のこどもたちができているのに、上の世代が「考えていることが分からない」となってしまうのは、今のこどもたちを総合的に捉える方法を上の世代が持っていないという話なのかなと思います。

タイトルとアイデアの間にある方策としては、もっと「大人とこどもをつなぐ」という部分にフォーカスして良いのではないかと思います。

会長 (2)の方策の1番目「地域に、地域で生きる大人の姿勢」を、こどもたちにつないでいく方策こそが(3)なのだろうということです。もし(3)の方策の前に何か前置きのものを付けるとすれば、その「つなぐ」というところに焦点を当てた説明を付け加え、そのための方策として、これら3つの柱があるのだと示していく形が考えられます。

なおかつ、そうした方策を取りながらつないでいく際、上の世代が作ってきたものを単に「無条件で引き継ぎなさい」と押し付けるのではなく、こどもたちが自分たちの価値観や考えに基づきながら作り変えていけるような余地や余白を作っていく。そういったことが(3)の方策の本質になっていくのではないかと、今の発言から感じました。

改めて検討は必要ですが、ここだけ方策の前に何もないと体裁的にもバランスが良くないと思いますので、「つなぐ」という観点から、上の世代と次の世代、それに続く世代をつないでいくという視点を前に置きつつ、この方策を進める方向でひとまず考えてみたいと思います。

委員 学校を代表している立場として1点だけ申し上げます。世代をつなぐための現実的、かつ非常に速効性のある方策として、もし可能であればここに盛り込んでいただきたいのが「探究活動」の視点です。

今、学校では探究活動を行っていて、こどもたちはかなり地域のことを学んでいます。特に高校においては「あおもり創造学」という名称で、地域のことを学ぼうという点に特化した活動が行われています。提示された3つの方策のうち、上の2つと下の1つ（既存の仕組みの活用）は少し性質が異なると感じています。もし下の1つに具体性を加えるのであれば、学校における探究活動とのつながりを文言化していただければ、より活用しやすくなるのではないかと考えました。

会長 「あおもり創造学」を含めた探究活動という視点を、3番目の項目などに上手く絡めて盛り込んでいこうということです。学校と地域をつなぐ場面において、社会教育や公民館などの施設が関わっていく余地は多分にあると思いますので、この視点は非常に重要だと考えています。

委員 探究活動についてもそうだと思うのですが、現場からはよく「講師が見つからない」「よく分からない」という声を聞きます。しかし、間に立っている立場から見ると、学校が使っている日本語と、一般の社会人や民間企業が使っている日本語には「ズレ」があると感じています。

経営者や普通の社会人は、実は「ものすごく手伝いたい」と思っています。子どもたちのために何かやりたい、学校に関わりたいと思っているのですが、その意識を学校側が汲み取る、あるいは「翻訳する人」がいないのです。同じことを言っているはずなのに違う言語で喋っているような状態で、上手くマッチングできていないだけだと思います。そこを、教育委員会が担うのかは分かりませんが、きちんとつなぐことができれば、民間からの先生がいないなどということはありませんと、民間側としては思います。

会長 学校だけでなく、社会教育施設や公民館等についても、まさにそのとおりだと思います。

大幅に方策を変えるというよりは、一つ一つの内容を深める意見を多くいただきました。方策の柱、見出しについてはひとまずこのような形でよろしいでしょうか。

全委員 異議なし

会長 ありがとうございます。それでは、改めての確認になりますが、(2)については一部修正案が出ましたのでそこを替えつつ、今日出していただいた意見を中身としてなるべく盛り込む形で、これから「叩き台」となる文案を作っていく段階に入ります。

文案ができた段階で、意見が反映されているかどうか各委員の皆様にチェックいただき、改めて指摘をいただければと思っています。

最後に、案件の3番目「その他」に入ります。事務局からもありましたが、私の方から一点提案をさせていただきます。教育長からいただいた諮問事項は1から3までありましたが、現在は諮問事項1について議論を行っている最中であり、諮問事項2と3についてはまだ扱うことができていません。また、議論の素材となる実地調査にも取り組めていない状況です。

そこで、ひとまず今期の生涯学習審議会としては、諮問事項1についての答申（中間まとめ）に留めることとし、2と3については次期の審議会及び社会教育委員の会議に引き継ぎたいと思いますが、この提案に賛同いただけますでしょうか。

全委員 異議なし

会長 ありがとうございます。それでは、そのように進めたいと思います。事務局においても調整をお願いいたします。続いて、今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いします。

（事務局から「今後のスケジュール」について説明）

会長 スケジュールについて確認等はありませんか。よろしいでしょうか。
これで本日予定していました案件を終了いたします。事務局へお戻しします。

3 閉会

(内容省略)